

ぼくじょう なかま はなし
牧場の 仲間たちの お話

ひと いぬ
人なつっこい 犬
スポック

スポックは、ビーグルと ボーダーコリーの ミックス犬で、
すばらしい 名犬です。見かけでは ドッグショーで 1等賞は
と 取れないかもしれませんが、賢さや 人なつっこさ、飼い主や
牧場の 仕事に 対する 忠実さは 大した ものです。



スポックは、^{あに}兄の^{ほくじょう}牧場で^{ねん}もう9年も^く暮らしています。
^{ほくようけん}牧羊犬としては、^{かなり}かなり^{ろうけん}老犬です。^{ほくじょうない}牧場内の^{おも}母屋や
^こニワトリ^こ小屋や^な納屋や^{さぎょうば}作業場などを^{まも}守るのに、いつも
^{おお}大いそがしでした。



スポックは、ニワトリを^た食べようとねらってくる
コヨーテを^{なんど}何度も^お追いはらいました。スポックが
いながったら、^{ほくじょう}牧場のネコさえねられるのです。

スポックには、畑をシカから守るという仕事もありました。

シカは、レタスや豆やビーツの葉っぱやほうれん草や、さらには農夫が畑のそばに植えたばかりの果物の木まで食べてしまいます。

シカは、見かけは美しいけれど、畑では歓迎されない動物です。

それでスポックには、シカが畑のそばに来たら追いはらうという仕事が与えられていたのです。



シカは スポックほど賢くは ありませんが、たまに、スポックを
出しぬくことも ありました。畑に 近づいても、物音や において
気付かれないように、スポックが ぐつりと ねむってしまうまで
待つことを 学んだのです。もちろん、目を 覚ましていたら、
決して 畑の 作物を かじらせたりなどは しませんから。

スポックが年を取ってきたころに、ある出来事がありました。
何だと思いませんか？ スポックはシカが好きになったのです。
結局のところ、シカは今までもずっと、スポックの身近に
いたわけですからね。めジカが子ジカを育てる様子も
見てきましたし、子ジカたちが成長して立派な
おジカやめジカになって、またもや畑をねらいに
もどってきたのも見えています。いつかスポックは、
シカたちを仲間と思うようになったのです。

ある月夜のころ、兄が牧場の様子を見るために
外に出てみると…何が見えたと思いませんか？
2頭のシカが、ヒノキの木の根の下で丸くなって
ねている犬を、クンクンとがいていたのです。
スポックはねむっていたのでしょうか？
兄は、スポックは目を覚ましていたけれど、
シカを歓迎していたので、においを
かがれてもねたフリをして
いたのだと思えました。



ある日の朝、もっとびっくりするようなことが
ありました。シカたちが丘の上の方に立って、
こちらを見下ろしていました。スポックはシカを
見つけると、そっちに走って行きました。兄は、
スポックが以前のようシカを追いはらおうとして
走って行ったのだと思いました。ところが、シカは
じっと立ったまま、こわがりもせずに待っているのです。
スポックはシカのそばまで行くと、仲間らしく
鼻をつき合わせて、あいさつしたのです！



さて、これはシカと番犬のお話でした。
または、神様の良き仲間の話という
こともできるでしょう！

知っていましたか？ 聖書には、いつか イエス様が 世界を 治めるために
もどって来られ、エデンの園が そうであつたように、すべてのものが 再び
すばらしく 美しく なるように してくださいと 書かれています。その 日には、
神様が 動物たち同士も みんな 仲間になるように してくださいということです。

「おおかみは 小羊と 共に 宿り、ひょうは 子やぎと 共に 伏し、
子牛、若じし、肥えたる 家畜は 共に いて、小さい わらべに
導かれる。」(口語訳聖書、イザヤ書 11:6)

スポックは 仲間たちと、すでに
未来のように 暮らしていた ようですね！

